

# 「社会」と「恋愛」の図式

—1930年代における張恨水小説『落霞孤鶩』の試みと挫折—

## The Schema of “Society” and “Romance”:

The Attempts and Failures of Zhang Henshui’s Novel “Setting Sun and Lone Wild”

李 斯 琪\*

LI Siqu

### はじめに

1930年代に大ベストセラー小説となったのが、新文学派の作品ではなく、鴛鴦蝴蝶派<sup>1</sup>の代表的な作家張恨水によって執筆された『啼笑因縁』である。『啼笑因縁』は1930年3月17日から11月30日にかけて、上海『新聞報』文芸副刊『快活林』に連載された章回体小説である。新聞に連載されるや一般民衆に広く読まれただけでなく、五四新文化運動以来章回体小説を否定し続けてきたエリート層からも注目された。ところが、この小説によって有名になった張恨水は「自分の代表作を聞かれたり、自分の好きな作品を聞かれたりしたとき、決して『啼笑因縁』を挙げなかった」<sup>2</sup>のである。そして、1931年8月、新作『落霞孤鶩』が世界書局によって出版された後、むしろ『落霞孤鶩』の方が優れているという態度を表明した。<sup>3</sup>しかし、張恨水自身が大いなる期待を寄せた『落霞孤鶩』は『啼笑因縁』のようには評価されず、さほど注目されなかった。<sup>4</sup>

本研究は、1930年代の文壇の『啼笑因縁』に対する評価を基に、『落霞孤鶩』をテキスト分析することで、作者の創作における意識の変遷を探究し、なぜ張恨水が『落霞孤鶩』を優れた作品と見なしたのか、なぜ『落霞孤鶩』が評価されなかったのかを明らかにしたい。さらに、この考察を通して、民国期に新文学派が鴛鴦蝴蝶派に与えた影響や、それを受けた両者の姿勢を理解したい。

\* リ シキ 国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程  
指導教員：新谷 秀明

<sup>1</sup> 鴛鴦蝴蝶派は、民国初期から五四新文化運動時期にかけて文壇で活躍した通俗文学のグループであり、才子佳人の恋愛物語が多かったため、鴛鴦蝴蝶派と称された。新文学勃興以降、新文学派から遊戯的文学、娯楽的文学と批判され、蔑称として使われる。

<sup>2</sup> 阪本ちづみ『張恨水の時空間——中国近現代大衆小説研究——』（勉誠出版株式会社、2019年3月29日）、p.42

<sup>3</sup> 「張恨水君来函」（天津『大公報』第8版、1932年1月15日）、「写《春明外史》时，是《春明外史》时之环境。写《啼笑因縁》时，又是《啼笑因縁》之环境。假以时日，读书稍稍获益，下笔又自不同（中略）落霞孤鶩一书，惨淡经营，虽言情之作，自视尚不落旧套，价值在啼笑因縁之上」

<sup>4</sup> 非絃「从『落霞孤鶩』想到鴛鴦蝴蝶派」（『庸報』第9版、1932年10月24日）、「关于落霞孤鶩的好坏，我们不愿意批评，因为那是一件很平凡的三角恋爱的故事」

## 1. 1930年代の文壇による『啼笑因縁』の批評

張恨水は、安徽省潜山の出身であり、1919年の五四運動後、北京大学への入学を希望するも経済的な理由により叶わず、新聞業界に身を投じた。1924年から1929年まで、北京『世界晩報』副刊『夜光』と『世界日報』副刊『明珠』<sup>5</sup>の編集をしながら、連載小説『春明外史』(1924-1929)や『金粉世家』(1927-1932)などを執筆した。1929年5月、上海の新聞記者団が北京を視察した際、張恨水は友人錢芥塵<sup>6</sup>を通じて、上海『新聞報』副刊『快活林』の編集長嚴独鶴<sup>7</sup>と知り合い、嚴独鶴から連載小説を執筆するよう依頼された。それが、『啼笑因縁』である。

文壇の注目を浴びた『啼笑因縁』について、張恨水は「(この小説を)陳腐な章回体小説だと考え、否定すべきだと主張する人もいる。また、章回体小説がここに至って少し変化したこと注目すべきだと主張する人もいる。文芸の革新を主張する人は、この小説は取り上げる価値がないと見なしているが、やや穏やかな人は文章に即して論じるだけであり毀誉褒貶どちらもある」<sup>8</sup>と認識していた。

文壇の『啼笑因縁』への批評について、先行研究として、高婷婷の修士論文「『啼笑因縁』接受研究」がある。その中で、鴛鴦蝴蝶派の嚴独鶴(1889-1968)、程瞻廬(1879-1943)、陸澹安(1894-1980)などからの評価と、新文学派の毛一波(1901-1996)、瞿秋白(1899-1935)、徐行(1903-1978)、夏征農(1904-2008)、丁玲(1904-1986)などからの批評が取り上げられている。<sup>9</sup>ここでは、そこに記載されていない批評を補足説明する。

①1931年の夏、張恨水は上海旅行の途中で新文学派の鄭振鐸(1898-1958)と出会い、鄭振鐸を通じて、茅盾(1896-1981)に『啼笑因縁』に対する意見を求めた。鄭振鐸によれば、茅盾はこの小説の描写技巧に否定的な態度は取らないと語ったという。しかし、鄭振鐸は古い章回体小説を書く作家の文学観を批判し、さらに作品の芸術的価値の低さを指摘した。<sup>10</sup>

②1931年12月20日、張恨水は飛行機事故で亡くなった徐志摩(1897-1931)に哀悼の意をささげるため、『北農学園』の「哀悼志摩專号」で「敬以一瓣心香祭徐君」を発表した。その中で、徐志摩が『啼笑因縁』の女主人公沈鳳喜の人物設定及び北京の下層社会の描写として天橋を描いた点を称えたということが記されている。<sup>11</sup>

③1932年1月4日、畢樹棠(1900-1983)<sup>12</sup>は天津『大公報』副刊『文学副刊』で「評張恨水啼笑因縁」を発表した。その中で、張恨水が流暢な北京語で小説を書いたことを称えたものの、登場人物の関寿峰父娘については、「現代社会を背景とする小説において、侠客のような人物を適切に描写することは容易では

<sup>5</sup> 1924年に成舍我(1898-1991)が『世界晩報』を刊行。1925年、『世界日報』社を設立。

<sup>6</sup> 錢芥塵(1886-1969)、『晶報』、『神州日報』の編集長。鴛鴦蝴蝶派の作家である。

<sup>7</sup> 嚴独鶴、上海『新聞報』副刊『快活林』の編集長。鴛鴦蝴蝶派の作家。『快活林』は、主に鴛鴦蝴蝶派の通俗小説を掲載する新聞紙副刊である。

<sup>8</sup> 「对于该书的批评,有的认为还是章回旧套,还是加以否定。有的认为章回小说到这里有些变了,还可以注意。主张文芸革新的人,对此还以为不值一笑。温和一点的人,对该书只是就文论文,褒贬都有」、張恨水「写作生涯回憶」(初出:北平『新民報』、1949年1月1日-2月15日)

<sup>9</sup> 高婷婷「『啼笑因縁』接受研究」(山東大学文学研究科修士論文、2023年5月25日)、p.29-34

<sup>10</sup> 張恨水「一段旅途回憶——追記在茅盾先生五十寿辰之日」(重慶『新華日報』、1945年6月24日)

<sup>11</sup> 張恨水「敬以一瓣心香祭徐君」(『北農学園』第12期の「哀悼志摩專号」、1931年12月20日)、「南京的朋友告诉我:徐志摩非常欣赏《啼笑因縁》,他平常不怎么看《新聞報·快活林》,但是现在为了这部小说,却不断地在看(中略)我想不至于吧?徐君是新文坛一颗灿烂的明星,对于我这种取径旧式的小说,未必同意(中略)今年秋天,老友郑颖荪对我说(中略)他非常喜欢你写的那个沈凤喜,说与一般人写的女性形象有所不同(中略)郝先生说:“志摩对于《啼笑因縁》中你描写的天桥一段非常赞赏”

<sup>12</sup> 畢樹棠、民盟のメンバー。1920年代、清華大学の図書館職員を務め、翻訳家として活躍する。1945年以降、清華大学・文學院の院長朱自清の誘いに応じて講師を担当する。

ない。(中略)要するに、関寿峰父娘は空想上の人物である」と指摘した。<sup>13</sup>

上記の内容と高婷婷『『啼笑因縁』 接受研究』で取り上げられた批評をまとめると、1930年代の文壇の『啼笑因縁』に対する評価は賛否両論であったことがわかる。『啼笑因縁』の優れた点として、巧みな描写、例えば、登場人物や北京風俗の仔細にわたる描写及び北京方言の採用、また軍閥による横暴の暴露が挙げられている。一方、批判された点としては、作品の社会的意義及び芸術的価値の低さ<sup>14</sup>、また張恨水の思想性の欠如が指摘されている。具体的には、中上流社会の暖衣飽食に対する批判的な視点の欠如、侠客を描写するという非写実的な傾向、「忠孝節義」の教えを表す侠客を崇拜するという封建的思想などが含まれる。<sup>15</sup>

新文学派が鴛鴦蝴蝶派を猛烈に攻撃したのは、『啼笑因縁』が連載直後、大きな反響を引き起こした時期であった<sup>16</sup>。前述したように、張恨水は鴛鴦蝴蝶派の中心的人物と見なされていた。しかし、張恨水自身はそれに反感を抱いており、「私は現代社会に新しい知識を求めている」<sup>17</sup>、「私の思想は常に変遷する。少なくとも時代の波に取り残される人にはなりたくない」<sup>18</sup>と強調し、進歩し続けようとした。であるからこそ、彼は新文学派からの批評を重要視していたのである。それは、彼が何度も徐志摩や茅盾に『啼笑因縁』に対する意見を求めたことから明確だろう。<sup>19</sup>また、張恨水は「文字での批判は喜んで受け入れよう」<sup>20</sup>、「相手の批評が正しければ、自身の欠点を補うことができる」<sup>21</sup>と、広く批評を受け入れた。次の節では、上記の『啼笑因縁』に対する批評に基づき、『落霞孤鶩』のテキスト分析を通して、張恨水の意識がどのように変遷したのか明らかにする。

## 2. 張恨水の意識の変遷と『落霞孤鶩』

『啼笑因縁』が発表された年、すなわち1930年、張恨水は『世界晩報』と『世界日報』文芸副刊の編集長を辞任した。同年秋、上海を訪れ、世界書局の経理であった沈知方<sup>22</sup>と知り合い、世界書局に『春明外史』と『金粉世家』の著作権を譲渡した。そして、単行本小説を4作執筆するという契約を結んだが、最終的に完成させたのは3作のみであった。それぞれ『落霞孤鶩』、『滿江紅』、『美人恩』である。<sup>23</sup>つまり、『落霞孤鶩』は連載を終えた『啼笑因縁』と間を空けずに執筆された作品である。張恨水は『落霞孤鶩』について以下のように述べている。「『落霞孤鶩』は苦勞して書き上げた作品である。恋愛小説であるが、旧套に縛られず、その価値は『啼笑因縁』を上回っていると自負している」<sup>24</sup>。そこで、本節では、張恨水が

<sup>13</sup> 畢樹棠「評張恨水啼笑因縁」(天津『大公報』副刊『文学副刊』第8版、1932年1月4日)、「張氏对旧小说之文笔,本有相当领会,清涛秀韵,是其所长。而描写北京土话之清脆调婉俏入神,尤为特色。北京话之入小说,由红楼梦至儿女英雄传一大变,至啼笑因縁又一新变,此是张氏之新贡献(中略)纵观《啼笑因縁》全书有一大遗憾,即写关氏父女之失败(中略)尤以现代社会为背景之小说,更不易将此类人物写之得体(中略)要之,关寿峰是想象的」

<sup>14</sup> 夏征農「読『啼笑因縁』」(『文学問答集』、生活書店、1935年10月)また、張恨水「一段旅途回憶——追記在茅盾先生五十寿辰之日」(重慶『新華日報』、1945年6月24日)

<sup>15</sup> 毛一波「『啼笑因縁』的解剖」(『文芸新聞』、1931年4月6日第4版)、巴尔「『啼笑因縁』的魅力」(『文芸新聞』、1931年4月20日第4版)と、夏征農「読『啼笑因縁』」(『文学問答集』、生活書店、1935年10月)

<sup>16</sup> 趙孝萱『鴛鴦蝴蝶派新論』(蘭州大学出版社、2004年)、p.35

<sup>17</sup> 「我对于现代社会,求着新知识」、張恨水「写作生涯回憶」

<sup>18</sup> 「我的思想时有变迁,至少我是个不肯和时代思潮脱节的人」、張恨水「写作生涯回憶」

<sup>19</sup> 張恨水「一段旅途回憶——追記在茅盾先生五十寿辰之日」(重慶『新華日報』、1945年6月24日)、張恨水「敬以一瓣心香祭徐君」(『北農學園』第12期の「哀悼志摩專号」、1931年12月20日)

<sup>20</sup> 「就文字批评我,我是始终乐于接受的」、張恨水「写作生涯回憶」

<sup>21</sup> 「有些地方,骂得我是很对的,我正可以予以改进」、張恨水「写作生涯回憶」

<sup>22</sup> 沈知方(1883-1939)は、1921年に上海で主に通俗小説を出版する世界書局を設立した。

<sup>23</sup> 『落霞孤鶩』は1931年8月、『滿江紅』は1932年9月、『美人恩』は1934年4月に出版された。

『落霞孤鶩』を優れた作品と見なした理由について、考察したい。

## 2.1 社会の間の暴露

まず『落霞孤鶩』のあらすじを見てみよう。この作品の前半は、封建的な小官僚である趙重甫の家で下女として働き、のちに婦女留養院に移った落霞の物語を中心として展開されている。落霞は、婦女留養院で同じく身寄りがない玉如と出会い、仲を深める。その後、様々な偶然から二人は共に男主人公の江秋鶩に恋をする。後半は、玉如の物語が中心となる。婦女留養院で火災が起こった際、落霞は現場に飛び込み、玉如を救出した。玉如は落霞に恩を返すために、自分に心を寄せていた江秋鶩を落霞に譲り、仕立屋の王福才と結婚した。しかし、結婚後、江秋鶩のことが忘れられず、二人の関係は再燃する。最後は、軍閥の陸伯清に脅迫されて妾となり、悲劇的な末路を辿ることとなる。

『落霞孤鶩』と『啼笑因縁』には、男女の恋愛物語に社会的要素、すなわち横暴な軍閥が描かれているという共通点がある。ただし、『落霞孤鶩』の登場人物とプロットは『啼笑因縁』よりも明らかに複雑である。以下は、登場人物の身分に基づいて作成した表である。

作品名	『落霞孤鶩』	『啼笑因縁』
登場人物		
女主人公 (下層社会の女性)	落霞(下女) 馮玉如(孤児)	沈鳳喜(大鼓書の娘)
上流社会のお嬢様	なし	何麗娜(財政総長の娘)
男主人公	江秋鶩(革命者・中学校の教員)	樊家樹(中上流階層の子弟・大学生)
軍閥	陸伯清	劉徳柱
封建小官僚	趙重甫 朱柳風(趙重甫の甥)	なし
商人	王福才(仕立て屋の息子)	なし
侠客(救済者)	なし	関寿峰父娘

表1. 『落霞孤鶩』と『啼笑因縁』に登場する人物(筆者作成)

この表から見ると、『落霞孤鶩』には『啼笑因縁』で描かれたような上流社会のお嬢様や侠客などが登場せず、作者の焦点は、二人の下流社会で生きる女性に当てられている。また、彼女らを虐げる存在として、軍閥だけでなく、小官僚や商人なども加えられている。つまり、社会の暗黒面を多方面から描き出したのである。

五四新文化運動以降、新文学団体である文学研究会は「人生のため」の写実主義文学を主張し、文学が現実社会をリアルに描き、大衆、特に社会の底辺にいる人々の生活を写實的に描写することを提唱した。1918年、胡適は、作家は「工場の労働者、人力車夫、農家、小売店や物売り、あらゆる苦しい状況」<sup>25</sup>を描写すべきだと主張した。沈雁氷は、作家は「『抑圧された者と侮辱された者』に共感する」<sup>26</sup>ことが重要で

<sup>24</sup> 『落霞孤鶩』一書、惨淡经营、虽言情之作、自视尚不落旧套、价值在啼笑因縁之上、「張恨水君来函」(天津『大公報』第8版、1932年1月15日)

<sup>25</sup> 「工厂之男女工人、人力车夫、内地农家、各处大販及小店铺、一切痛苦情形」、胡適「建設的文学革命論」(『新青年』第4卷第4号、1918年)

<sup>26</sup> 「同情『被损害者与被侮辱者』」、沈雁氷「自然主義与中国現代小説」(『小説月報』第13卷第7号、1922年)

あり、社会問題の暴露への関心を高めるべきだと述べた。また、魯迅も『英訳本「短編小説選集」自序』（1933）で、「私はいわゆる上流社会の墮落と下層社会の不幸を、次々と短編小説の形式で発表した」<sup>27</sup>という創作意図を明確にした。このような背景から、「新文学の作家は労働者の生活に焦点を当て、人力車夫や下女などのイメージを描き出す作品を創作し始めた」<sup>28</sup>のである。

『落霞孤鶩』においても、下流社会の実状として下女の物語が描かれている。小説の冒頭には、人買いにより封建的な小官僚である趙重甫の家に売られた下女の落霞が登場し、彼女が如何に虐げられたか、その惨状が細かく描写されている。趙重甫と彼の妻、そして娘までもが落霞に暴行を働き、趙重甫の甥である朱柳風が落霞を脅迫して継室にしようとする場面も描かれている。このような状況で、落霞は、「いつか大統領に会えたら、必ず提案しよう。婦女を誘拐する者は死刑に処され、下女を買う家庭は罰せられるべきだ」<sup>29</sup>と、恨みの念を抱いた。このように、作者は封建的な小官僚の醜悪な側面に焦点を当て、その非人道的な行為を描き出している。

また、小説の第9回から第17回にかけては、婦女留養院に場面が移され、そこにいる女性の困窮した生活が描かれている。「ここには三、四百人の女性がいる。（中略）孤児、誘拐から救出された者、被災者、罪を犯したが酌量された者もいる」<sup>30</sup>。施設の入口には警察が常駐し、院内には院長、看守などの職員が配置されている。日常生活は「労働もしくは読書、或いはそれが半日ずつという三つの形式に分かれている」<sup>31</sup>。食事に関しては虫の入った薄い粥と臭い漬物しか提供されず、彼女たちがここを離れる唯一の方法は男性に引き取られて結婚することであった。

婦女留養院の描写は、実際に取材されたものである。民国期、身寄りのない女性を支援する社会施設として存在していたのは、済良所と婦女習工場のみであった。済良所は売春婦を收容し、婦女習工場はそれ以外の女性を收容していた。結婚適齢期になると、彼女らは写真を撮られ、展示室で公開されたり新聞に掲載されたりして、結婚相手が募集されていた。<sup>32</sup>その事実も、『落霞孤鶩』で男主人公が婦女留養院から女主人公を引き取る場面に完全に一致する。<sup>33</sup>



図2. 民国期における中国北京の済良所と婦女習工場

(写真左と中央は、済良所で女性を選んでいる男性の写真、<sup>34</sup>右は婦女習工場に收容された結婚適齢期の女性の写真)<sup>35</sup>。

<sup>27</sup> 「上层社会的墮落和下层社会的の不幸」、魯迅『魯迅全集（第7巻）』（人民文学出版社、1981年）、p.389

<sup>28</sup> 「新文学作家开始将焦点聚焦于这些个体劳动者，创作以车夫，女佣等个体劳动者的形象的作品」、孟隣「新文学早期的人力车夫形象」（『鄭州大学学报』第6期、1998年11月）

<sup>29</sup> 「我若有一天认识了大总统，必定和他建议，把拐匪都订成死罪，买丫头的人家，都要受罚」、『落霞孤鶩』の第7回。本研究中の『落霞孤鶩』のテキストは中国文史出版社（2018年）を使用した。

<sup>30</sup> 「这里面大大小小，有三四百人，可良莠不齐。有的是从小在这里面长大的孤儿，有的是从拐子手上救下来的，有的是灾民，有的是从警察厅打官司，分拨过来学好的」、『落霞孤鶩』の第10回

<sup>31</sup> 同上、「这里分做工，读书和半工半读三种工作，看人的情形而论」

<sup>32</sup> 孫高傑「1902-1937年北京的婦女救济 - 以官方善業为研究中心 -」（南開大学歴史学研究所博士論文、2012年5月）

<sup>33</sup> 『落霞孤鶩』の第11回

上記の施設は身寄りのない女性に一時的な避難所を提供し、結婚相手を見つける手助けをしていたという点では彼女らを救済したと言えるが、一方で、問題がないとも言えなかった。1921年10月25日の『晨报』に「不良的済良所」という記事が掲載され、依頼者男性からの賄賂や脅迫により、所長が女性側の意思を考慮せず、強制的に結婚させているという内容が報告された。<sup>36</sup>『落霞孤鶩』にも、王福才から賄賂を受け取った婦女留養院の職員が玉如を強制的に結婚させようとしたという描写がある。<sup>37</sup>

しかし、王福才に嫁いだ玉如は幸せな生活を送ることはできず、義父母によって「富豪や官僚の家に入りする」<sup>38</sup>よう強制され、仕立て屋の客引きをさせられた。また、軍閥の陸伯清の家を訪れた際、陸に気に入られ、彼は王福才の命を盾に王福才の両親に玉如を譲渡するよう迫った。彼女は「売買」され、強制された運命から逃れる術を持たなかったのである。

近現代の中国文学において、『落霞孤鶩』が婦女留養院で暮らす女性の悲運を描いた唯一の作品であろう。『落霞孤鶩』は、下流社会で生きる落霞と玉如の2人の女性が封建的な小官僚の趙家、婦女留養院、軍閥の陸家、仕立て屋の王家、それぞれの場面で直面する苦境を、彼女らの視点から描写している。単に軍閥による圧迫を描いた『啼笑因縁』より描写の幅を広げることで、どうしても社会の底辺から抜け出せない一般庶民の女性の悲劇を浮かび上がらせた。さらに、作者は社会を描く過程で、権力者階級への非難を表現しようとした。つまり、『落霞孤鶩』は張恨水が文壇の主流に迎合し、社会を写実的かつ批判的に描こうと試みた作品と言えるのではないか。

## 2.2 非写実的な侠客の削除

1920、30年代、鴛鴦蝴蝶派によって執筆された武侠小说は、一般大衆の間で人気を博した。1923年1月から雑誌『紅』（第22期）に連載された平江不肖生<sup>39</sup>作の『江湖奇侠传』は、1928年に『火燒紅蓮寺』（張石川監督、北京語）と題名を変え、明星映画会社によって映画化され、武侠小说、武侠映画ブームの火付け役となった。<sup>40</sup> 1928～1931年、中国で計227本の武侠映画が上映されたという。<sup>41</sup>

武侠小说の流行は揺れ動く時代背景と関わっている。民国期の中国では、各地方の軍閥が野心を持ち、内戦がたびたび起きていた。既存の法律や秩序は崩壊し、罪と不正が横行し、大衆は搾取され圧迫されていた。そのような社会の中で、大衆は正義を守る英雄の登場を求め、自分の手に負えない運命を変えてくれることを渴望していた。

一方、1930年代も左翼文芸が普及した時期であった。先進的な知識人にとって、武侠小说は大衆が現実の苦しみから逃れるために空想の世界に浸る傾向を助長したものであった。したがって、彼らは武侠小说を「純粹な封建思想の文芸」<sup>42</sup>と見なし、それが国民の覚醒を妨げ、革命運動の発展を阻害するものとして、猛烈な批判を加えた。例えば、鄭振鐸は侠客の登場が国民の「奴隸根性」の表現であると考えた。1932年、「論武侠小说」と題名した文章の中で、鄭振鐸は以下のように述べている。

「大衆は極端な暴政に圧迫され、不満や怒りを募らせながらも力がなく反抗できない。また、精神年齢

<sup>34</sup> Sidney D. Gamble 『Peking: A Social Survey』(New York: George H. Doran Company, 1921年)

<sup>35</sup> 『世界日報』、1928年8月26日、第7版

<sup>36</sup> 作者不明「至于所女出嫁，更不自由，欲嫁之人，每每所长，不许其领取。而佗父走卒，老迈龙钟之輩，则或以利诱，或以威迫，所长为维持饭碗计，即所女不愿意，亦向警厅假報已得同意。此种案件已发生多次」、「不良的済良所」(『晨报』、1921年10月25日)

<sup>37</sup> 『落霞孤鶩』の第15回

<sup>38</sup> 「到大宅门里去，穿堂入室」、『落霞孤鶩』の第22回

<sup>39</sup> 平江不肖生(1889-1957年)、本名は向愷然である。民国武侠小说の創始者と言われている。

<sup>40</sup> 范伯群、孔慶東『通俗文学十五講』(北京大学出版社、2003年1月)、p.147

<sup>41</sup> 羅泰琪『民間電影人記事』(中国文史出版社、2019年4月)、p.154

<sup>42</sup> 「純粹的封建思想的文芸」、沈雁氷「封建的小市民文芸」(『東方雜誌』第30卷第3号、1933年2月1日)

が低いため、ふっと現れたかと思えばすっと消え去る『超人』のような侠客が自分のかわりに強い者と戦ってくれることを切望している。これは完全に卑劣な根性に基づく幻想だ。実現不可能な幻想をもって、自身の希望の持てない反抗心を慰めようとしているのである」<sup>43</sup>

また、茅盾や瞿秋白（1899-1935）も鄭振鐸と同様の立場を取り、それぞれ文章を執筆し、武侠小説が大衆に及ぼす有害な影響を指摘した。茅盾は武侠小説に登場する侠客が清官（支配階級）に利用される点<sup>44</sup>に注目し、武侠小説を「支配階級が大衆を麻痺する麻醉薬」<sup>45</sup>と見なした。瞿秋白によれば、大衆は支配階級に対する一切の幻想を捨て去り、自分の運命を自覚的に掌握し、実際に革命運動に身を投じるべきだという。<sup>46</sup>

明らかに、『啼笑因縁』を執筆した際、張恨水は先進的な知識人のように大衆の革命への意識を目覚めさせる意図を持ち合わせておらず、むしろ大衆の好みに迎合する一面を示したのである。『啼笑因縁』において、侠客のような人物、関寿峰父娘が登場している。侠客を登場させた原因について、張恨水が「その当時、上海の通俗小説は二つの道を歩んでいた。一つはお色気小説であり、もう一つは武侠や神怪小説である」<sup>47</sup>と語ったように、当時、武侠小説は大ブームを巻き起こしていた。それを受け、『啼笑因縁』を掲載した上海『新聞報』の編集長嚴独鶴より「読者の興味を引くために、侠客を加えるようにと依頼を受けた」<sup>48</sup>という。しかし、関寿峰父娘は強盗に連れ去られた樊家樹の救出、軍閥に強奪された大鼓書の娘鳳喜の救出及び軍閥劉徳柱の暗殺など、物語の要所で重要な役割を果たしている。特に女侠の関秀姑は作品内で唯一、義侠心、独立心、反抗心を持つ女性として描かれている。

注目すべきは、張恨水が『落霞孤鶩』において、侠客の露骨な描写を意識的に避けたことである。小説の第7回で、落霞が趙家で虐待を受けた後、侠客が彼女を救いに来る夢を見るという場面が描かれている。しかし、夢から覚めた落霞は、

「趙家の地下室には電灯がなく、石油ランプが1つだけ燃えている。部屋は薄暗く、ぼんやりしている。落霞は起き上がってランプの芯を調節し、『素晴らしい夢だったが、この世にあのような場所があるだろうか』と思った」<sup>49</sup>

と、失望した。この場面は、夢と現実の対比によって、侠客のような人物は実世界には存在しないということが強調されている。

『落霞孤鶩』には侠客は登場しないものの、女主人公の義侠心、そして苦境に陥った際の独立心と反抗心は『啼笑因縁』に登場する女侠関秀姑より受け継がれている。小説の第5回で、作者の張恨水は落霞の義侠的な一面を描いた。国民政府が革命者を逮捕し、殺害していることを知った際、落霞は江秋鶩に情報を伝え、彼が逮捕を免れるよう図り、彼の命を救った。また、第15回で婦女留養院で火災が起こった際にも、落霞は危険を顧みず、躊躇うことなく現場に飛び込み、玉如を救出した。

そして、落霞の独立心と反抗心を表す場面としては、まず第8回が挙げられる。朱柳風が金銭をもって落霞を誘惑した際、落霞は「私たちのような下女は、お金で自分を差し出すと思っているんでしょう」<sup>50</sup>と、

<sup>43</sup> 「一般民众，在受了极端的暴政的压迫之时，满肚子的填塞着不平与愤怒，却又因力量不足，不能反抗，于是他们的幼稚心理上，乃悬盼着有着一类‘超人’的侠客出来，来无踪，去无迹的，为他们雪不平，除强暴。这完全是一种根性鄙劣的幻想；欲以这种不可能的幻想，来宽慰了自己无希望的反抗的心理的」、鄭振鐸『論武侠小说』『中国文学研究（下）』（人民文学出版社、2000年）、p.334

<sup>44</sup> 例えば、侠客は清官を助け、犯人を検挙することである。

<sup>45</sup> 沈雁冰「封建的小市民文芸」（『東方雑誌』第30卷第3号、1933年2月1日）

<sup>46</sup> 瞿秋白「乱弾・吉訶德的時代」、『瞿秋白文集（第1卷）』（人民文学出版社、1985年）、p.376

<sup>47</sup> 「在那几年间，上海洋场章回小说，走着两条路子，一条是肉感的，一条是武侠而神怪的」、張恨水「写作生涯回憶」

<sup>48</sup> 「要求我写进一些豪侠人物，以增加读者的兴趣」、張恨水「写作生涯回憶」

<sup>49</sup> 「赵家下屋子里，是没有电灯的，只有一盏点一根灯草的小煤油灯，屋子里昏暗无光，真也有些像梦境。于是坐了起来，将灯芯扭着大了一些，坐起来一想道：“梦境真算是痛快，然而天下哪会真有一个地方？」、『落霞孤鶩』の第7回

断固として拒否した。また、第30回で、江秋鷺と玉如は落霞の目を盗んで、互いを愛するようになった。江秋鷺は落霞に「娥皇女英」<sup>51</sup>の物語を聞かせ、玉如を連れて三人で逃げようと提案し、落霞の意思を探ろうとした。その際、落霞は「そうすると、あなたは社会から非難を受けるだけでなく、自分の良心に問っても説明できないでしょう。それに、他人の結婚を破壊することも善い事ではありません」<sup>52</sup>と答え、江秋鷺の提案を拒否した。このような落霞の毅然とした態度から、積極的に自身の尊厳を保とうとする姿勢が窺える。

一方、玉如もまた、自立的で意志の強い女性として描かれている。彼女の独立心は、経済的な自立への歩みという形で表現されている。王福才との結婚後、義父母から軍閥の歡心を買うよう要求された玉如は、実家を出よう夫を説得し、以下のように語った。

「引っ越しを決めた以上、一つの事業として人様に見せてやりましょう。私は女工として働くことができるし、あなたも仕事を見つけて働いてほしい。(中略)要するに、努力すれば生活はなんとかなるのよ」<sup>53</sup>

そして、軍閥の陸伯清に妾となるよう脅迫された際、北京から上海へ逃げようと計画を立てた。これらのことから、運命に翻弄されたが、彼女の抑圧に屈しない強い精神、そして自分の運命を切り開くための積極性が窺える。

以上、『落霞孤鷺』は社会からの圧迫を描きつつ、その犠牲となった玉如が自らの運命を掌握できず、正義や平等を求める様子が描き出されており、『啼笑因縁』において横暴な軍閥の脅迫に屈した沈鳳喜が自身の運命を嘆いたこととは対照的である。そして、『啼笑因縁』に登場するような侠客の存在が否定されたため、『落霞孤鷺』では侠客が異なる形で表現された。それは、空想上の侠客に救いを求めるより現実的であろう。同時に、玉如の悲運は、女性の力だけでは社会からの圧迫に抗うことはできないということを示唆しているとも言えよう。

### 2.3 恋愛物語における「欲望批判」

新文学の作品では、主人公の悲恋は常に戦乱や社会の腐敗、国家・民族の衰退など、社会的・歴史的背景と結びつけられた。例えば、郁達夫作『沈淪』の結末で男主人公である「彼」が「祖国よ！祖国よ！私の死はお前のせいだ！」<sup>54</sup>と叫んだことから、郁達夫が男主人公の失恋を国家や民族の問題と結びつけている姿勢が窺える。

それに対して、張恨水が1920年代に執筆した『春明外史』の男主人公楊杏園の結末を見ると、主人公の悲劇につながる原因は社会的背景によるものではなく、主人公自身の性質によるものである傾向が見受けられる。つまり、社会批判・現実批判はそれほど強くなされていない。しかし、『啼笑因縁』では樊家樹の恋人沈鳳喜が軍閥に奪われ、『落霞孤鷺』においても、軍閥に脅迫された玉如に「私に罪があるとしても、それは社会のせいだ」<sup>55</sup>と語らせることで、彼女の悲惨な人生が社会によって導かれた運命であることが明確に示されている。このような描写は、新文学者が主人公の悲劇を社会的背景に起因するものとする立場に通じており、また、五四運動以降、「反軍閥」という革命目標とも一致している。

<sup>50</sup>「你以为我们当丫头的，就是随便拿你几个钱，可以把人格卖掉的吗？」、『落霞孤鷺』の第8回

<sup>51</sup>「娥皇女英」は一夫多妻の共同生活を比喻する。娥皇は、古代中国の伝説上の女性である。堯の娘で、妹の女英とともに舜の妻となった。

<sup>52</sup>「不但社会上会议论你，就是自问良心，也有些说不过去。拆散人家的婚姻，也不是好事」、『落霞孤鷺』の第30回

<sup>53</sup>「现在我们既然争气搬出来了，就当作一番事业给人家看，我打算接一些女工来做，你也可以找一家铺子去上工。(中略)只要肯努力，糊口总是办得到的」、『落霞孤鷺』の第29回

<sup>54</sup>「祖国呀祖国！我的死是你害我的！」、郁達夫『沈淪：郁達夫小説集』（作家出版社、2000年）、p.37

<sup>55</sup>「假使我有什麼罪惡，是社会逼我做的」、『落霞孤鷺』の第38回

ただし、注目すべきことは、『啼笑因縁』と『落霞孤鶩』の主旨が社会による圧迫を描き出すだけに留まらないことである。『啼笑因縁』では、軍閥からの金銭的誘惑により、沈鳳喜は恋人の樊家樹を裏切り、最終的に正気を失った。つまり、その要因は軍閥からの脅迫だけでなく、彼女自身の虚栄心及び金銭至上主義思想によるものでもあり、<sup>56</sup>社会環境と登場人物自身の性格の外的・内的、両方の要因をもって悲劇が描写されたのである。

『落霞孤鶩』の序文で、張恨水は再びその創作意図を明言した。「登場人物の結末がそれぞれ異なるのは、環境によるものだけでなく、人の性格も影響しているからである。(中略) 老子の言葉『造化は不仁、萬物を以て芻狗と為す』(筆者注：本来の『道德経』では「天地不仁」)のように、すべてが社会のせいだとは言えない。それで、『落霞孤鶩』を書いたのである」<sup>57</sup>。

張恨水は『落霞孤鶩』で、封建的な小官僚、軍閥、商人などによる様々な圧迫を描き出している。それと同時に、玉如、江秋鶩、落霞の三角関係を通じて、登場人物の複雑な感情の動きも描いている。小説には玉如と江秋鶩の恋、江秋鶩と落霞の結婚、そして玉如と江秋鶩の関係の再燃というプロットが組み込まれており、その中で、玉如は友人である落霞を裏切るべきではないと江秋鶩への恋心を抑えようとする。それは最終的に悲劇的な結末をもたらすのだが、それに至る過程で、友情と愛情との間で揺れ動く玉如の心情が浮き彫りにされている。<sup>58</sup>このような描写を通じて、張恨水は何を伝えたかったのだろうか。

『啼笑因縁』では、樊家樹と沈鳳喜との恋愛を通して感情と金銭欲の衝突が、『落霞孤鶩』では、江秋鶩と玉如との恋愛を通して理性と恋愛欲、或いは倫理と感情の対立が書き表されている。<sup>59</sup>江秋鶩と玉如、落霞の三角関係において、江秋鶩は「感情・欲望」を象徴し、落霞は「倫理」の象徴として、恋愛感情的なものが倫理的な枠組みの中で行う重要性を示している。玉如が落霞を裏切り、江秋鶩との恋に落ちたことは、ある意味では「倫理」に背くということが仄めかされているのではないだろうか。

このように、張恨水は沈鳳喜と玉如の悲劇を通じて、金のために愛を裏切り、愛のために倫理に背くことを非難している。言い換えれば、彼の価値観には「金<感情<倫理」という明確な「秩序」の枠組みが存在するのである。すなわち、あらゆる欲を制御する倫理的思考の重要性が主張されているということである。この点からも、張恨水の思想が倫理道徳を基準に善悪を判断するという儒教思想から離脱していないことがわかる。また、玉如の悲劇は反道徳的な行為への罰と見なすことができ、張恨水の儒教的な勧善懲悪思想を反映しているのではないだろうか。言い換えれば、玉如の悲惨な結末は、不倫や略奪愛の人々にとっては警鐘と言えよう。

以上、1930年代初頭の『啼笑因縁』と『落霞孤鶩』では、張恨水は人間の欲に焦点を当て、その批判を恋愛物語の核心に据えた。欲によってもたらされる墮落の描写には、人々の倫理観を養い、規範に導くという張恨水の意図が潜在していると考えられる。まとめて言えば、作品では、大衆の生活に焦点を当て、広範囲にわたり社会の闇を暴き出しながら、物語に倫理的な深みを持たせたのである。それにより、「社会批判」と「欲望批判」が絡み合う構図が形成されている。要するに、『落霞孤鶩』は社会的意義と倫理的意義を持ち合わせた作品だと言えるだろう。

### 3. 『落霞孤鶩』が新文学派に否定された原因

張恨水の『落霞孤鶩』は新文学派に評価されなかった。1932年、『庸報』に「從『落霞孤鶩』想到鴛鴦

<sup>56</sup> 湯哲声「『啼笑因縁』的細読与再考」(『新文学史料』、2020年8月22日)

<sup>57</sup> 「至其结果不同，则由于各人之个性者半，由于各人之环境者亦半(中略)此老子所谓，造化不仁，以万物为刍狗者也，岂仅社会之罪恶而已哉！吾于是乎作《落霞孤鶩》」、『落霞孤鶩』の序文

<sup>58</sup> 『落霞孤鶩』の第12、16、27、31回

<sup>59</sup> 「吾人做事，理知常有与感情冲突之日，而一涉儿女私情，尤所不免」、『落霞孤鶩』の序文

蝴蝶派」と題された記事が掲載され、その中に「我々は『落霞孤鶩』の良し悪しについて批評するつもりはない。それは平凡な三角関係の恋愛物語に過ぎないからだ」<sup>60</sup>と記されていた。しかし、「恋愛物語」であることだけが『落霞孤鶩』が受け入れられなかった理由なのだろうか。

五四期の中国では、社会と国民の悪弊を暴露する「問題小説」が流行しており、その話題の1つとして、男女の恋愛・結婚観をめぐって「包辦婚姻」<sup>61</sup>派と「自由恋愛」派が対立し、盛んに討論されていた。茅盾の統計によれば、1921年4月から6までのわずか2ヶ月間に全国の新聞や雑誌に掲載された小説120本余りのうち、98%が恋愛関連であったという。<sup>62</sup>

五四新文学作家の小説にも「恋愛物語」がよく見受けられた。ただ、彼らの作品では権力者階級による「自由恋愛」への圧迫が描かれ、儒教的な倫理道徳を批判することに焦点が当てられていた。つまり、作品の主題は純粋に「恋愛」を描くことではなかった。例えば、巴金の『家』には覚新、梅芬、瑞鈺の三角関係が描かれている。祖父に旧式結婚を強制された覚新は恋人の梅芬と別れ、瑞鈺と結婚するが、二人の女性は共に悲劇的な運命をたどり、死を迎える。このように、作者の巴金は「恋愛物語」を描きながら、その批判の矛先を封建的旧家族や儒教の教え「三綱五常」に向けたのである。

また、1923年、新文学女性作家馮沅君は短編小説『旅行』を発表した。この作品では、女主人公である「私」と、既婚者の男主人公（親の取り決めによる包辦婚姻）との恋愛物語が描かれている。<sup>63</sup>ただ、作者の馮沅君は不倫や「略奪愛」に対して道徳的な評価を行うことなく、むしろ女主人公の心の葛藤や苦しみに焦点を当て、彼女が旧い礼儀や道徳に縛られた恋愛心理から抜け出そうとする様子を大胆に描き出した。要するに、新文学の作品においては、「包辦婚姻」の悲劇と、新思想としての「恋愛」の崇高さが語られ、個性の解放が浮き彫りになっている。

それでも、前述の通り、張恨水も自身の「恋愛物語」により深い価値を見出した。すなわち「欲望批判」である。ただし、張恨水は儒教思想に基づき、既婚者と関係を持つ青年男女に警告を与えることを立脚点とした。儒教は「節欲」<sup>64</sup>を主張し、「重義軽利」<sup>65</sup>及び「克己復礼」<sup>66</sup>の思想もまた、儒教精神の核心である。『啼笑因縁』で沈鳳喜が金銭欲に負け、軍閥の妾となって自らを墮落させたことは、「重義軽利」の思想に背く。また、『落霞孤鶩』の玉如は、金銭的誘惑には屈しなかったものの、既婚者を愛してしまった。それもまた「発乎情、止乎礼義（情に発し、礼に止まる）」<sup>67</sup>という古来の戒めに背くのである。二人は共に、欲望が制御できずに歯止めを失ってしまったことから惨めな結末を迎えた。つまり、張恨水は作品内で儒教の精神を標榜しており、その倫理観こそが彼の「恋愛物語」の中核を成すのである。しかしながら、このことは、欲望の専制から意志を解放するという五四精神と逆行するのではないだろうか。

一方、1920年代後半に入ると、プロレタリア革命文学がブームとなり、左翼作家連盟（以下、左連と略称）が文壇の中心勢力となった。左連は被搾取階級の反帝・反封建の闘争を宣揚し、強烈な革命的傾向を特徴とした文学団体であった。左連初期の作品には「恋愛と革命」をテーマとした小説も少なくない。蔣光慈（1901-1931）の『野祭』（1927）、『菊芬』（1928）、そして丁玲（1904-1986）の『韋護』（1929）、『一九三〇年春上海』（1930）などがその例として挙げられる。<sup>68</sup>これらの小説では、主人公たちが「恋愛と

<sup>60</sup> 菲絃「关于落霞孤鶩的好坏，我们不愿意批评，因为那是一件很平凡的三角恋爱的故事」、「从『落霞孤鶩』想到鴛鴦蝴蝶派」（『庸報』第9版、1932年10月24日）

<sup>61</sup> 「包辦婚姻」とは、両親が子の意見を聞かずに結婚相手を決めることを指す。包辦婚姻の基準となるのは、相手の家柄や財産であり、占いやその他の封建的迷信に影響されるケースもしばしば見られる。

<sup>62</sup> 郎損（茅盾のペンネーム）「評四五月の創作」（『小説月報』、1921年8月）

<sup>63</sup> 馮沅君『卷菴』（人民文学出版社、1998年）、p.15-24

<sup>64</sup> 『中国哲学大綱』（中華書局、2017年5月）、p.562-567

<sup>65</sup> 『論語』「里仁篇第四」

<sup>66</sup> 『論語』「顔淵篇第十二」

<sup>67</sup> 『詩経』大序

革命」のどちらを選択するかに困惑し、最終的に自身の恋愛を犠牲にして革命に身を捧げる様子が描かれている。つまり、左翼作家たちにとって最も重要だったのは、主人公を社会革命の道に導くことであった。

興味深いのは、張恨水の『落霞孤鶩』においても、革命者である江秋鶩が登場し、国民政府が革命者を逮捕する場面が描かれているということである。そして江秋鶩が下層階級の女性と恋愛結婚し、婚約の儀式を簡略化したことは、彼が階級的格差を見破り、封建的な古い習俗から解放されたという先進的な一面を示している。しかし、江秋鶩の描写は彼の夫としての生活に止まり、革命者として活躍する場面は描かれていない。言い換えれば、『落霞孤鶩』にとって「革命と革命者は、この小説の外套に過ぎない」<sup>69</sup>のである。言い換えれば、張恨水は革命宣伝運動そのものに関心を寄せ、表現しようとしたわけではないのである。したがって、『落霞孤鶩』は単なる「恋愛物語」と見なされ、文壇に否定された。

張恨水は自身の小説を単なる「恋愛物語」と見なされることに納得がいかなかった。鴛鴦蝴蝶派との違いを明確にするために、彼は「鴛鴦蝴蝶派は専ら恋愛を描くが、私の一部の小説は社会派小説だ」と述べ、写実的な文学傾向を強調しようとした。しかし、彼は新文学派が指摘した「恋愛物語」を文字通りにしか捉えておらず、その奥深くに隠れていた両者の思想の差異を見逃していた。つまり、張恨水の儒教の精神を基にした「欲望批判」という主題は、五四新文学作家が主張した反封建・反儒教の「啓蒙文学」及び左翼作家が提唱した「革命文学」とは相容れないものであったのだ。

## おわりに

以上、『落霞孤鶩』は新文学派による『啼笑因縁』への批評を踏まえ、張恨水がいくつかの変更を加えた作品である。「社会的」、「批判的」、「写実的」、「反抗的」などの新しい要素を取り入れ、横軸では社会問題に焦点を当て、その闇を描き出している。それと同時に、縦軸では登場人物の複雑な心情を描き、感情・欲望と倫理との対立に焦点を当てることで「欲望批判」という主題を浮かび上がらせている。要するに、『啼笑因縁』と比べると、社会的意義及び倫理的意義が強化されているのである。言い換えれば、小説の娯楽性を重視する立場から、写実性と倫理性を重視する立場へと移行したことが、張恨水が『落霞孤鶩』の価値が『啼笑因縁』を上回ったと考えた理由の一つだと考えられる。

そして、上記の変化は、新文学の勃興により批判にさらされた張恨水が、意図的に新文学派の描写技法を取り入れたということを示している。それは、張恨水が新文学派との対立を避けようとしたことを意味し、そのことから、新文学派の文壇での影響力が裏付けられるだろう。しかし、新文学派は依然として張恨水の変化には目もくれず、『落霞孤鶩』を「恋愛物語」と見なし、否定的な態度を採り続けた。いくら小説における恋愛要素を薄め、社会問題を全面に描き出そうとも、その思想が新文学派と噛み合わない限り、受け入れられることはないということである。

さらに注目すべき点は、1930年代前半まで、張恨水が新文学派の言うところの「啓蒙」「革命」などの派手な題材を扱わず、日常の些細なことや個人の心情に焦点を当てながら、その中で小説の倫理的価値を高めようと意図していたということである。彼は登場人物が選択を迫られた際、伝統的な儒教思想をもって判断を下させようとしたが、それは大衆に儒教の教えを説くための彼なりの試みだったとも言えるだろう。その意味では、『落霞孤鶩』は単に青年男女の恋愛を描いた作品ではなく、その中には張恨水自身の思いが込められているのである。

<sup>68</sup> 陳国恩『中国現代文学』（北京大学出版社、2010年9月）、p.80-81

<sup>69</sup> 「革命和革命者不过充当了这部小说的外衣」、朱周斌「『新中之旧』与『旧中之新』——張恨水『落霞孤鶩』解讀」（『池州学院学報』、2018年12月、第22卷第6期）

**参考文献**

## [日本語]

阪本ちづみ『張恨水の時空間——中国近現代大衆小説研究——』、勉誠出版株式会社、2019年

## [英語]

Sidney D.Gamble『Peking:A Social Survey』、New York : George H.Doran Company、1921年

## [中国語]

趙孝萱『鴛鴦蝴蝶派新論』、蘭州大学出版社、2004年

謝家順『張恨水年譜』、安徽文芸出版社、2014年

范伯群、孔慶東『通俗文学十五講』、北京大学出版社、2003年

陳国恩『中国現代文学』、北京大学出版社、2010年

鲁迅『鲁迅全集』、人民文学出版社、1981年

瞿秋白『瞿秋白文集（第1卷）』、人民文学出版社、1985年

郁達夫『沈淪：郁達夫小説集』、作家出版社、2000年

巴金『家』、人民文学出版社、2001年

馮沅君『卷蕋』、人民文学出版社、1998年

羅泰琪『民間電影人記事』、中国文史出版社、2019年

張岱年『中国哲学大綱』、中華書局、2017年

孫高傑「1902-1937年北京的婦女救濟—以官方善業为研究中心—」、南開大学歴史学研究科博士論文、2012年

高婷婷「『啼笑因縁』接受研究」、山東大学文学研究科修士論文、2023年

朱周斌「『新中之旧』与『旧中之新』——張恨水『落霞孤鶩』解讀」、『池州学院学報』、2018年12月、第22卷第6期